



森本あんり

もりもと あんり  
国際基督教大学学務副学長

パリ同時多発テロを受けて

# イスラムの神学者はどこにいるのか

昨年11月13日、パリで過激派組織 IS (イスラム国) による同時多発テロが発生。死者130人、負傷者300人以上の大惨事となった。10月末に起きたロシアの航空機墜落もISの犯行と言われる。こうしたイスラム過激派のテロに私たちはどう向き合ったらいいのだろうか。

パリのテロ事件が世界を震撼させた直後、11月18日のことです。『アパ・ルーム』(アパ・ルーム日本委員会) という聖書日課の小冊子に、あるアメリカ人女性のこんな話が載っていました。

かつてパリを訪れたときのこと、雑踏の中で大きな荷物を2つ抱えて困っていると、突然荷物の中一つを持って歩き始める人がいる。一瞬泥棒かと思つて身を固くしたが、そうではなくて手助けをしてくれていることがわかり、すぐに自分も残りの荷物をもって一緒に歩いていった。その「善きサマリヤ人」は、ヘジャブをかぶった若いムスリム女性だったが、目的地まで来ると、何も言わずに去っていった。自分はただ一言、その背中に向かって「シユ克蘭ー」(アラビア語の「ありがとう」と叫ぶことができただけだった……)。

『アパ・ルーム』は、世界100カ国以上で300万人が読んでいると言われます。本誌の読者にはなじみが薄いかもしれませんが、わたしの家ではもう20年ほど使っています。毎日の証しは世界中から集められており、おそらく1年以上も前から編集作業が始められているでしょう。

この話も、この日を選んで載せられたわけたは、この世ではなやみがある(16・33、同) という現実を解釈する神学をじっくりと養う期間を持つことができたのです。

ところが、幸か不幸か、イスラム教の歴史にはそのような余裕がありませんでした。ムハンマドはすでに存命中に勝利を収め、破竹の勢いで社会全体をイスラム化し拡張を続けていきました。そのため、20世紀に入ってオスマン帝国の没落とともにイスラム世界が衰退していくと、その事実を神学的に受け止めることができなかつたのです。そして70年代末にイランのパーレビ体制が崩壊すると、人々はその失敗の原因を不信仰で西洋化した政府に見るようになりました。ですからそれ以降は、イスラム主義が強く前面に出てくるのです。

## 神学論争の必要性

イスラム教には中央集権的な階層構造がありません。影響力のある導師は各地にいますが、それぞれに信奉者がいるだけで、指導者たちの間で論争をすることはありませんし、信徒が彼らに批判的な問いを向けることもありません。そもそも『クルアーン』は神

ではなく、たまたまそう配列されていただけです。けれども、あの日これを読んだ人は、誰もが起きたばかりのテロ事件を思い浮かべたことと思います。世界中のキリスト者が、いくつもの言語でこれを読み、そして折ったことでしょうか。名も知れぬこの若いムスリム女性の善意は、暴力と殺戮の報道にささくれ立った心に、容易には押しつぶされぬ日常の平和な共存があることを教えてくれます。この偶然の巡り合わせに、わたしは神意を感じます。

## イスラムの歴史と神学

何度でも繰り返して言わねばならないことですが、イスラム教はテロリズムを是認しているわけではありませんし、イスラム教徒の大多数はテロとは無縁の平和な信徒です。無差別の大量殺戮を行う人はキリスト教徒にも仏教徒にもヒンズー教徒にもいますし、無宗教者や無神論者にもいます。

そのことを確認した上で、今日はもう少し先へ話を進めましょう。大多数の信徒のこととはわかつた。では、指導者たちはどうなのか。「自分たちは無関係だ」「自分たちも被害

の最終的な啓示で、キリスト教の聖書学のよ

うな批判的研究は不可能です。

「神学論争」というと、世間では無益なものだの代名詞です。でも、ときにそれはとても大事です。もちろん、神学者たちにも賛成反対のいろいろな意見があるでしょう。だからこそ論争が起きますのですが、それがなくしては、信仰が極端な誤りに走る危険を防ぐことができません。そしてわたしたちは、その無惨な結果を見せつけられています。

現代イスラムに神学が欠けていることを批判するのは、お行儀のよい本誌の作法には合わないかもしれません。でも、キリスト教の神学者が何を語っても、テロを起こすイスラム教徒の心には届かないだろうと思います。彼らには、やはり彼らの指導者が語りかけねばならないのです。せめてわたしたちは、お互いに異なる宗教の信徒として、冒頭のような「善きサマリヤ人」のムスリムをお手本にしながら善意と扶助の日常を積み重ねていきたいと思えます。

※イスラム教徒の女性が髪を隠すために用いるスカーフのこと

者だ」という声は聞こえてきますが、テロ行為を非難する言葉、とりわけイスラム信仰そのものに基づいて同信の徒を批判する言葉はあまり聞かれませんか。これは神学のつとめです。イスラム教の神学者たちは、どこへ行ってしまったのでしょうか。

イスラム教にも、優れた神学の歴史があります。近代西洋の学問は、中世イスラムの貢献なしには生まれなかつたとすら言われています。ところが、その後のイスラム世界で神学が発展することはありませんでした。キリスト教神学はその間、宗教改革で深刻な内部論争を経験し、啓蒙主義の突きつける合理的な懐疑にも答えねばなりませんでした。しかし、イスラム神学はこうした知的挑戦を受けることなく今日まで来ました。

キリスト教の歴史をふり返ると、最初の数世紀は惨憺たるものです。創始者は十字架で刑死し、信徒は迫害を受け、地上の権力とはまったく無縁でした。キリスト教徒は、「わたしの国はこの世のものではない」(ヨハネ 18・36、口語訳) というイエスの言葉の通り、この世における成功や繁栄とは別のところで、「教会」という組織を作らねばなりませんでした。つまりキリスト教は、「あなたが